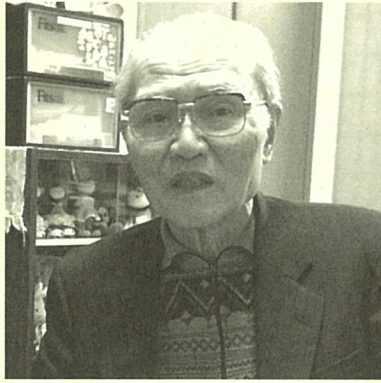


# 和紙 だより

## 越前和紙への提言



### ■府川 次男(ふかわ つぎお)

昭和4年東京生まれ。東京学芸大学書道科卒。東京都三鷹市立第六小学校、渋谷区立原宿中学校校長、全日本書写道教育研究会事務局長、東京都中学校書写研究会会長、帝京大学・武蔵野女子大学講師などを歴任。専門は書と拓本であるが、和装本に魅せられ、教員の仕事の傍ら製本技法を独学で探求。朝日カルチャーセンター、産経学園などで和装本の作り方を指導し、その魅力と楽しみ方を伝えている。書、拓本の個展数回、創作和装本の個展数回開催。雑誌等掲載多数。NHK「おしやれ工房」出演。著書「和装本の作り方」綜芸舎刊、「はじめての和装本」文化出版局刊。

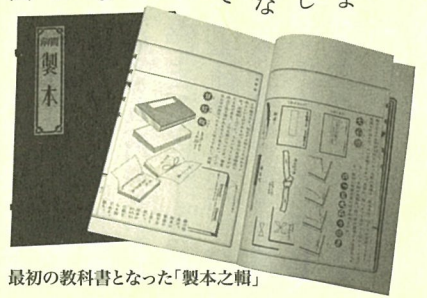
### ■府川次男さん(和装本研究・指導・制作)「アイデア無限の和装本作り」

#### ●和装本ははじめ

大学の書道科に入った時に、恩師、篆刻の山田正平先生のお宅に拓本を見に訪ねた折、家の奥の方で奥様が早稲田大学図書館収蔵の和装本の補修をされていました。何しろ戦後で紙のない時期で、字を書くものに飢えていて、広告の紙の裏などを利用して自分でノートを作っていたものだから、いい綴じ方がないかなあと思っていたのです。奥様に、こういう本の作り方を書いた本がないですかと伺ったら、「製本之輯」(アオイ書房刊、初版昭和十六年)という本を紹介して下さいました。この本は、当時の優れた製本職人、上田徳三郎という人から、岡山出身の出版人、志茂太郎が製本技術のあれこれを口述筆記し、童画作家、武井武雄の詳細な図解と画家で装幀家でもあった恩地孝四郎が編集を担当した門外不出の貴重な本で、三日間だけという約束で貸して頂きました。コピー機のない時代ですから、写真の好きな友達に頼み込んで全ページを接写してもらい、本に仕立てました。今でも持っていますが、これが私の最初の教科書です。

またある時、古本屋で「銀花」という工芸雑誌を立ち読みしていたら、山田音七さんという秋葉原で造本職人をやっている人のことが紹介されていて、居ても立つてもいられず、すぐ電話をして会いに行きました。山田大成堂という和綴じ技術を継承している製本会社の店主で、今でも高価な装丁の美術関連図書の製本をやっているところです。目の前で職人さんが手際よく和装本を作ってくれて感激しましたが、

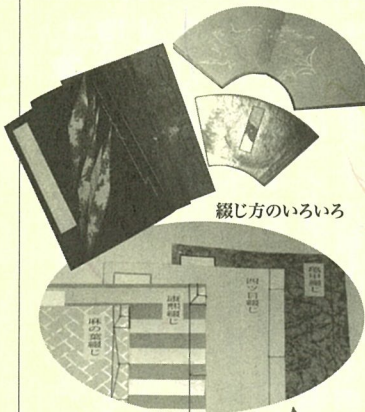
素人がよく訪ねて来てくれたと天井までご馳走になりました。(笑)。教員をしながらのいわば道楽ですが、そのうち、自分流の綴じ方を考え、紹介しているうちに、人に知られるようになり、新聞社が取材にきました。新聞に掲載されると、次々に人から人へのつながりで展覧会、カルチャーセンターに呼ばれるようになってしまいました。



最初の教科書となった「製本之輯」

#### ●手に馴染む楚々としたシンプルス

西洋の装幀は皮製の表紙に金の型押し模様を施したりして、美術的な価値が前面に来るようですが、和装本は手に馴染む和紙の感触や楚々としたシンプルスが魅力だと思います。特別な道具も入らず、誰でも幾度か作るうちに必ず上手になってきます。できれば和紙で仕立てたいものです。楮紙、画仙紙(唐紙)、烏の子、麻紙などを本部分に使い、表紙や見返しには、千代紙、染め紙、揉み紙など趣味に飛んだものが合います。文字や絵を描くときは薄手



綴じ方のいろいろ

葉っぱの経文集



豆本いろいろ綴じ

の紙がいいでしょうし、コレクシオンを貼る台紙に使うときは堅めの鳥の子などをお勧めします。オリジナルにこだわる方は、材料はこだわらずにいろんな素材に挑戦してみるのもいいですね。

紙を半分折り貼り合わせた「でつちよう本」と巻物から発展した蛇腹状の「折り本」の二つの基本形を覚えるだけで結構いろんなものが作れます。伝統的な綴じ方は、四つ目綴じ、中国清朝の康熙帝が始めたという康熙綴じ、亀甲綴じ、麻の葉綴じ、大和綴じ、胡蝶綴じなど。創作綴じを考えるのも楽しく、私のオリジナルは十数種類あつて名前も付けています。綴じ糸は、普通太めの絹糸を使いますが、本の内容に合わせて使えばよく、色の豊富なレース糸も最適です。

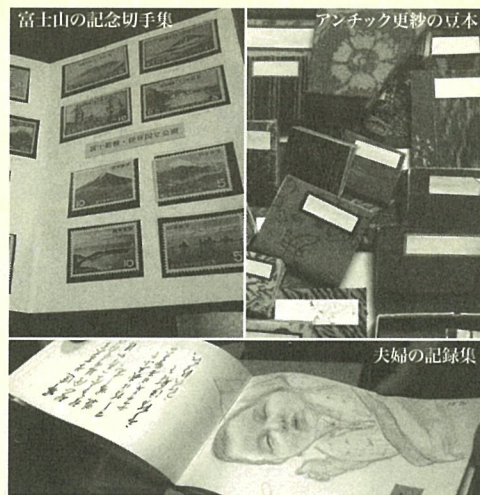
#### ●楽しみ方さまざま

自分なりの感性で、愛着のあるものをまとめて本にしたらいのです。何でも本にしてしまつて、コレクシオン癖がエスカレートしてしまうのも問題ですが(笑)、ここにあるいくつかの自作本を紹介しますと、アンチック更紗を使った豆本、仏像をスケッチして版木に彫り、和紙に拓本を取ったものを集めた作品集、結婚した時から夫婦で文字と絵を書き連ねた夫婦の

年賀状傑作選

■「幹心ランプ」ー和紙あかりの専門店

京都祇園エリア・鴨川沿いに、築九十年の町屋で和紙照明器具を扱っているギャラリー兼ショップが「幹心ランプ」だ。平成四年、京都嵯峨野にアトリエ開設した店主の濱中さんの号



富士山の記念切手集

アンチック更紗の豆本

夫婦の記録集

記録集、雑誌の表紙を切り抜いた日本庭園の本、記念切手集、年賀状傑作選、葉っぱに写経し自然の造形とお経を楽しむもの、展覧会や旅先で入手したカードや絵はがき集、縞柄の木綿の古布のコレクション、行った飲み屋で集めた箸袋や酒のラベル集、江戸文化が育んだ江戸文字（相撲文字、寄席文字、歌舞伎文字、千社札文字）の貴重な文化的コレクション、茶会の献立集、などなど。

和紙をもつと使ってもらうためには、和紙への関心の高揚が大切でしょうね。私がお手伝いできる所はその当たりだと思えますが、和紙の生活用品の製作指導やできた作品を展覧会で頻繁に紹介してあげるのはいいことです。カルチャーセンターで永く教えている経験から申しますと、若い人は和紙を知らないけれど、ひとたび教えてあげるとすごく喜んで凝りますよ。また、せっかくなので日本の文化なので、初等教育で和紙に触れる機会を増やしたいものです。和紙の材料ももつと輸入材料などを吟味して新原料を開拓しても面白いと思います。高いものだけですと、日常的に楽しめませんので。

「幹心」の名にちなんで店の名が付けられた。この照明器具は「和紙だけでつくる。和紙だけで支える。」という唄い文句が示す通り、補強材なしの和紙だけで造形されたシェードが特徴。幾何学的な折り目を施したもの、布のように柔らかいひだを施したシェードなど、様々な表情に加工された和紙が、それを際立たせるシンプルな台座に取り付けられている。一点一点手作りで。



●やさしい光へのこだわり

幹心さんの和紙の原点は、郷里の小豆島で子供の頃よく遊んだお寺の障子を通した光の美しさだという。目が弱かったせいもあって、強い電気の光や蛍光灯はまぶしくて使えなかつた。自宅ではいつもろうそくの光でゆつくり夕食を取る。部屋の隅の棚には、毎日使うろうそくがストックされている。一般的に、蛍光灯のように波長の短い青系の光は仕事などの活動的な時に適しているが、波長の長いキャンドルや白熱灯などの赤・黄系の光は、くつろぎ効果がある。しかも自然素材の和紙は日の光や照明の光を適度に透過・乱反射させ、柔らかい光を創り、リラックスタイムの脳波、アルファ波を出

し、癒し効果があると言われている。工作が好きだった幹心さんは、最初は友人に自らデザインした和紙照明をプレゼントしたりするうちに、大変好評で、作品を販売するようになった。

「私にとっては照明というのは大変大切なものです。ヨーロッパの人は白熱灯を部屋のあちこちにバランスよく配置しますが、照明のあり方が日本と違うと思います。昔に比べて日本もだいぶ光をコーディネートするようにはなりましたが、一般家庭では、まだ明るくするというのが第二義で、精神的な意味合いを大切にしているという意識は、残念ながら少ないのではないのでしょうか。うちの照明は洋室にもよく合いますので、自分を楽しみ、生を楽しむ、いわば人として生きる時間に降りそそがれる癒しの雰囲気をつくくり楽しんで頂きたいですね。」と幹心さんは込めた思いを語る。

●コンニャク糊

作品には他所と違った特長がないといけなさと考え、和紙シェードはそれだけで独立して立たせようと試みた。制作するときに一番苦労した点だ。昔から和紙にはコンニャク糊がいいとは聞いていたが、本で調べても、誰に聞いても詳しい作り方はわからない。最後は京都や伊勢のコンニャク屋さんを何軒も回ってみた。同業者と間違われて、怪訝な顔をされ、門前払いされた所もあったが、訳を話して、コンニャク糊の製法を教えてほしいと頼むと、少しずついろんな事を教えてくれた。コンニャク屋さんから糸道を付けてもらったとはいえず、そこからは試行錯誤の連続。最初の丸障子の照明器具を創るのに、三年くらいかかった。

二匁の厚手のものを使っていたが、現在はすつきりとした印象にするため、八匁のものを使っているという。毎年、夏にデザインを決め、九月十月に和紙を注文し、十二月頃、寒漉きの和紙が漉かれ、春に納品される。梅雨から夏を越し、九月頃、湿度が五十%くらいになるのを見計らって、糊を塗る。精製したコンニャク粉を練って糊を作り、塗っては天日で乾かす作業を七回ほど繰り返す。最初のうちは粉と水と石灰も正確に計って調整していたが、今では湿度や温度で微妙に変えるころ合いも、触って分かるようになってきた。その後、精緻な折り目などの後加工を施し、最後に組み立てる。

「京都にはいいコンニャク屋さんがあって、ある店は暖めないのだったら石灰を入れなくてもいいのじゃないかと助言してくれた所もありました。コンニャクもものすごく種類があって、一番いいのは糸コンニャク材料なのだそう。糸コンニャクはいい材料でないと切れてしまうから。」



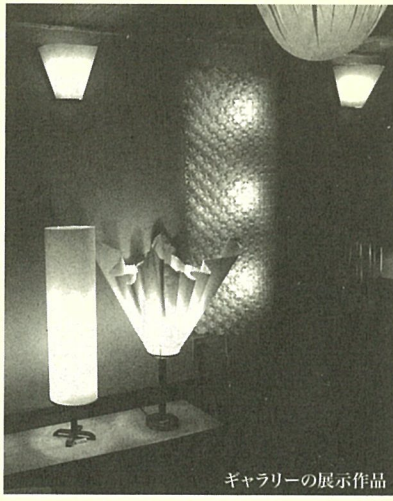
「幹心ランプ」の外観



三種類のデザインから選んで制作体験ができる

「幹心ランプ」店内 URL: <http://www.kanshinlamp.com>

京都らしい趣のある祇園のショップでは、事前予約をすれば、三種類のデザインのの中から好きなものを選んで、体験制作ができる。人気は、四角い折り目のついたもので、糊を塗って木型に合わせて折り目を入れ、一時間くらいで仕上げる。照明器具に囲まれてコーヒーもいただけ



ギャラリーの展示作品

## 漉き場探訪

### ■ 瀧株式会社

#### 「得意の加工技術を活かして差別化」

越前市のパピルス館前の通りを少し南へ行くと、ヘルベチカの文字で「TAKIPAPER」と描かれた瀧株式会社工場の工場が見えてくる。創業は昭和四十年。揉み紙加工の手内職の仕事から始まったという比較的新しい会社だ。昭和五十七年には、会社組織となり、様々な紙加工機械を導入しながら「紙生産から加工まで」を目標に成長してきた。現在従業員はアルバイトを含め三十人。企画部長の瀧道生さん、営業部長の白根克康さん、ウェブ担当の中村聡さんにお話を伺う。

営業部長の白根克康さん、ウェブ担当の中村聡さん、企画部長の瀧道生さん



#### ● 加工機械で最終製品まで

同社の創業当初は主にドーサ引き、揉み紙などパッケージ関連や紙人形用の紙の手加工作業の一部を受け持ったが、少しずつ資金を貯め、紙加工に付随する設備を増強してきた。平成十八年には新工場が完成し、今では和紙を製造する抄紙機、和紙を貼り合わせる合紙機、スクリーン印刷機、高速カッター、箔押し・抜き加工機、紙厚調整の出来るロール、断裁機などの機械類をはじめ、紙の調湿処理(シーズニング)、紙コーティング用の吹き付け施設も併設されている。生産される製品は、封筒、メモ

パッド、便箋、葉書、結婚式用カード、ノートなどのステーションナリー関連、耳付きの酒類のラベルなどで、大部分が都市部の紙製品メーカーや商社のOEMとして収められる。

取引先は、エンドユーザーにかなり近い感覚を持ったメーカーが多く、市場の動向に合った企画重視の和紙製品を出来るだけ迅速に、手頃な価格で提供するのがモットーだ。「出来ない」とは言わないのを社是としているそうで、営業は、社長も含め三人が、常にネタを持ち歩き、提案型営業を心がけている。

「おつき合っているメーカーさんは、紙の総合企画会社と卸しも兼ねているような会社で、ターゲットや季節毎に常にあるような企画を考えているところ。デザイナーも多く、商品本体だけでなく、パッケージやちよつとしたロゴなどにも細かい神経を遣わなくてはなりません」と白根さん。

#### ● インターネットの役割

当社はホームページを二〇〇四年に開設し、翌年ネット販売を開始した。現在、ネットショップの売上は総売上の数%程度だが、インターネットは信頼度アップや宣伝に貢献して余りあるという。平成二十年の総務省データによると、日本のネット利用者は今や九千万人、普及率七五%と重要性を加速するインターネット。飛び込みの営業をかける時も、予めウェブサイトを紹介し、同社の総体を理解してもらう。ウェブサイトを見て、問い合わせしてくる所からの注文も全体の二ケタ台と増えてきた。昨年からは厚生労働省の「ふるさと雇用再生特別基金」を利用し、ウェブ担当の中村さんを採用した。中村さんは東京で物品のインターネット販売に従事していた経験を生かし、ウェブサ

イトの再構築に取り組んでいる。

「他の大きな和紙産地の中にはブランドイメージが統一されていて、コンセプトが明確な所もありますが、越前はこれというイメージの統一が出来ていないのが最大の弱点だと思えます。技術は高いけれども、都市部の人たちから見ると、知名度が低いですね。今、和紙自体のポータルサイトを立ち上げて、和紙業界の全体の底上げを考えているのですが…」

同社は、インターネット開設を機に自社製品の開発にも乗り出し、和紙の産地直送便と銘打ち、「ジカタキ」のコーナーを設けた。地元デザイナーや和綴じ帖、はがき類などが販売されている。



2004年開設の同社ウェブサイト URL: <http://www.takipaper.com>

#### ● 美顔和紙

最近の同社の話題商品は何と言っても、「美顔和紙」だ。これもウェブサイトを見た東京の美容研究所が、コンタクトしてきた。メイクした顔の上に和紙を押し当て、マッサージをすることによって、リンパの流れがよくなり、小顔効果やリフトアップ効果が期待できるというイシダ美容研究所が開発した美顔方法だ。和紙によって、肌に着着した酸化汚れが取れ、肌の働きを活性化させるという。普通のあぶらと

「インターネットは、市場への扉と捉えています。受け入れられるかどうか分からない商品も市場に問うことができますし、DTPの設備と人材も揃っているのでお客さまの製品仕上がりイメージを可能な限り追求していただけるんです。」と瀧さんはネットの反応を語ってくれた。

「紙では、皮脂しか吸着することが出来ないが、この洗顔和紙は立体的に漉き込まれた超ロング繊維が不要な酸化汚れも落とす。しかも丈夫。メディアでもかなり取り上げられ、地元新聞は勿論のこと、NHKや人気ビジネス番組「ワールドビジネスサテライト」の「トレンドたまご」のコーナーでも紹介された。原材料は企業秘密だが、無漂白・無添加でケミカルなものは一切使用していないオーガニックな和紙だ。

り紙では、皮脂しか吸着する

話題の「洗顔和紙」セット



新工場内部  
平成18年完成の  
新工場



会場となった  
新宿パークタワー

会場の模様

■新機軸で産地をアピール「東京えちぜん物語」(展示商談会)  
去る三月五日〜七日の三日間、東京新宿パークタワー・リビングデザインセンター一階ホールで「東京えちぜん物語」(展示商談会)が開催された。  
例年開催されていた物産展形式の「東京えちぜん物語」を、今回は具体的な物づくりや商談につなげていこうと、より実質的な形式に変更。昨年からは専門家のアドバイザーや、支援を受ける「中小企業基盤機構本部」での目利き会を通じ、改良を加えた商品が並んだ。越前市からの十九の参加企業のうち、和紙部門ブースでは、和紙組合員が六社、組合の独自ブース、産地商社一社が参加し、全体の約半数を占めた。組合の「素の紙展」から商品化された「素の紙」ブランドのカードやあかりにも興味注がれ、発注にも繋がるなど、新機軸の試みはまずまずの滑り出し。入場者は三日間で千五百名を数え、また同ビルで開催されていた「NIPPON MONO ICHI」への出展者とのコラボの誘いもあり、今後が期待できるものとなった。

## 情報欄

### ●イベント情報

#### ■神と紙のまつり(大掘り出し市)

時:2010年5月3日(月)〜5日(水)

場所:和紙の里通り(越前市新在家町)特設テント  
大掘り出し市、バザー、教室等、楽しいイベント多数

#### ■大瀧神社・紙祖神 岡太神社春季祭礼

時:2010年5月3日(月)〜5日(水)

場所:岡太神社・大瀧神社(越前市大滝町)

#### ■第20回越前陶芸まつり

時:2010年5月29日(土)〜31日(月)

場所:越前陶芸村(越前町小曾原)

即売、イベント多数

#### ■金沢ペーパーショー2010

時:2010年6月11日(金)〜13日(日)

場所:石川県産業展示館

展示、即売、体験、実演あり

#### ■福井県の伝統工芸士展

時:2010年6月25日(金)〜7月7日(水)

場所:東京池袋 全国伝統的工芸品センター

展示、即売、体験、実演あり

#### ●襖デザインコンペティション2010

関西襖内装事業協同組合は昨年に引き続き、現代の住空間に求められる襖絵のデザインを一般公募する。最優秀賞一点、賞金30万円他。6月より一般公募開始、8月1日に一次審査、9月29日〜10月2日開催の「Living & Design 2010」展で最終審査。今年のテーマは「和」。

詳細: <http://fusumae2010.kansai-fusuma.com>

#### ●越前和紙工場が舞台の映画撮影快調!

越前和紙の工場やそれを取り巻く自然を舞台に、日本のへそにある「祠(ほこら)」を守る越前和紙の紙漉職人の姿を描いた映画「HESOMORI-へそもり」の撮影が2009年12月14日、越前市大滝町で始まりました。

監督・脚本:入谷朋視。

出演者:永島敏行、佐野史郎、渡辺いっけい、烏丸せつこ、若林豪他。

2010年7月公開予定、乞うご期待!

公式サイト: <http://hesomori.com>

編集後記・近年では珍しい東京での「春の雪」の日、府川さんの取材で三鷹へ。府川さんの最近ハマっている収集品は、分刻みの勝負!つい最近も平成22年2月22日22時22分の刻印が押されたJRキップが欲しくて、深夜三鷹駅に並んだとか。齢80を迎えられるお茶目な情熱に脱帽!勿論素敵な和装本になってました。(よ)